

氏名(本籍)	おか だ ひろ ゆき 岡 田 浩 行 (新潟県)		
学位の種類	博 士 (文 学)		
学位記番号	博 甲 第 3583 号		
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	文芸・言語研究科		
学位論文題目	小林秀雄の〈遂行的〉批評 - 「様々なる意匠」成立まで -		
主 査	筑波大学教授		新 保 邦 寛
副 査	筑波大学教授	博士 (人文科学)	清 登 典 子
副 査	筑波大学教授	博士 (文学)	芳 賀 紀 雄
副 査	筑波大学教授	博士 (文学)	松 本 肇
副 査	筑波大学助教授	DL	増 尾 弘 美

論 文 の 内 容 の 要 旨

小林秀雄について、いわば近代批評の創始者であり、その方法は創造的批評であると、評価が定まっているかのように思える。しかしその内実は曖昧なままで、ただ、論者各々の文学観に基づいた何ら客観性のない見解が繰り返されるばかりである。その原因は小林秀雄をあまりにも特権化し過ぎた点にあると思われる、それを回避すべく帰納的な研究態度が求められるところである。それ故本論文では、あくまで多様な文化的文学的課題が錯綜する大正末期の文壇にこだわる。そして、何よりも先ず小林が小説家とし出発した点を重視し、これまで粗略にされてきた初期小説の詳細な分析に基づいて、その小説の性格が批評の内実を規制していく様態を描き出そうとする。さらにそれをもって小林の批評の本質に迫ろうとした。

本論文の構成は、以下の通りである。

序章 先行研究批判、および本論文の目的

第Ⅰ部 第一章 成長の経路 - 「一つの脳髓」論 -

第二章 小林秀雄の滑稽本小説 - 「鉛」論 -

第三章 小林秀雄の実験的心境小説 - 初期小説にみる演劇的特性 -

第Ⅱ部 第一章 小林秀雄の異説本格小説論 - 「性格の奇蹟」論 -

第二章 芸術家の技巧と意識 - 「芥川龍之介の美神と宿命」論 -

結章 小林秀雄の〈遂行的〉批評

第Ⅰ部は小林秀雄が同人誌を舞台に書いた三つの小説を分析したものである。処女作『一つの脳髓』は、旅にある「私」がすべてに自覚的であろうとする神経衰弱的な心的機制を克服するに至る小説だが、神経衰弱は当時青年に流行し、小林も罹っていた病であり、またその反映である性格破産は同時代文学で共有されたテーマであった。そうしたテーマは掲載雑誌『青銅時代』にも散見し、それらの作品との関係からこの小説が「私」の成長物語であることが分かる。そしてそれは『東海道中膝栗毛』見立てになっている『鉛』の

場合も同様で、主人公の「私」が擬えられる弥次喜多やゴーゴリの作中人物も当時性格破産者と分類されたことから窺える。そもそも『ポンキンの笑ひ』も含め三つの小説は似通った点が多く、特に、主人公たる「私」が結末で呆然自失に陥る事態を他ならぬ「私」が描くという構成が共通していて、看過できない。これは同時代の「心境小説」をモデルにした結果と考えられる。すなわち「心境小説」には、成長した現在の「私」によって以前の「私」が客観的に報告される形式と、成長した現在の「私」がその今の心境を主観的に報告してみせる形式があるが、その両者を重ねて、書くことが成長することであるような、いわば遂行的あり方を小説に求めたことから生じた事態なのである。また当時流通した、成長を自作自演する「私戯曲」「私芝居」がこうした方法の生成を促した点もあるとする。

第Ⅱ部は、以上のような小説の特異性が批評の方法を規制していく様態を描き出そうとするものである。『性格の奇蹟』は同時代の「本格小説／心境小説」論争を引き受けつつも、主題はあくまで、心理分析の抽象性を否定し、どちらであれ芸術家にとって唯一の「性格の発見」こそ肝要と説く点にある。しかも心理分析による人間理解が性格破産を齎したとの認識が小林にはあって、それを思えば「性格の発見」とは芸術家の成長に他ならず、小説の試みがそのまま批評に应用されている事態が窺える。続く『芥川龍之介の美神と宿命』では、こうした基準をもって芥川龍之介を押し測り、結果、心理分析を脱却できない性格破産者、つまり『一つの脳髓』の「私」のような成長に至らなかった芸術家として裁いたとする。

結章では第一評論集『文芸評論』自体を問題にしているが、特に巻頭に置かれた『からくり』に注目する。『からくり』はラディゲ『ドルジェル伯爵の舞踏会』の鑑賞体験を描く「私批評」な訳だが、小説的批評とも批評的小説ともつかぬ小林文学の本質を最もよく示しているばかりか、読後の感動を契機として批評家としての成長が企てられている点を見ると、成長を基準に作品批評を試みつつ作者自らも成長を遂げていく、遂行的批評の方法が成立していると言える。正にそれこそが小林の目指した批評であり、『文芸評論』全体を貫く方法でもあった、と結んでいる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

日本文学の研究にとって小林秀雄があまりに特権的存在であり過ぎたせいも、これまで小林論と言えば、各々の文学観で翻訳し、その先見性なり普遍性なりを言い立てる類のものがほとんどで、小林の思想の内実については、比較文学的研究からその一端を垣間見るぐらいがせいぜいであった。同時代的文脈の中で小林の批評の生成を問うことが肝要なのは自明ではあるものの、確かに卓越した小林の知性の容量をどう推し測るかは難問である。そこで著者は、あえて同時代の文壇に限定することを提唱する。例えば海外思潮の受容でも、当時の文壇を通したものととの関係を問題にしていく。いわばそれを本論文の方法としている訳だが、その結果、目覚ましい事実が明らかになっている。小林の批評の特質や方法が同時代の主要な文学的課題、特に「心境小説」概念とそこから派生した「私演劇」「私芝居」「私批評」などと密接に交渉しつつ生成されるものであることや、小林の批評の本質が実は小説創作の過程で形成されたことなどである。無論それは、「心境小説」が脱領域的なジャンルであって、小説とも批評ともつかぬものであることから生じた事態だが、こうして生成された小林の批評を、著者は、批評を試みつつ自らも成長を遂げていくところから「遂行的批評」と命名する。多くの実証的手続きを経た上での命名であり、今後、小林の批評を特定する術語として、広く学界で受け入れられていくものと確信している。

とはいえ、瑕瑾がない訳ではない。本論文の最大の特徴は、第Ⅰ部の初期小説を詳細に分析した点である。それ故『一つの脳髓』や『鮎』のみならず、『ポンキンの笑ひ』についても独立した章を立てて論ずるべきではなかったか。また批評を論じた第Ⅱ部や結章について、なぜ『性格の奇蹟』と『芥川龍之介の美神と宿命』、それに『からくり』なのか、選択の基準が小林秀雄の専門家以外にも明確に伝わるような論述を心掛けてほ

しかった。さらにジャンルの混淆や書く行為（いわば「エクリチュール」）の問題は、フランス近代文学より直接摂取した可能性も捨て切れず、その点の目配りが必要だったかもしれない。

ただ、それは今後の課題というべきで、同時代の文壇で流通した膨大な資料を引検し、整理し、その中で小林の文学観が定まっていく様態を導き出した著者の功績は少しも減るものではない。本論文は今後の小林秀雄研究の起点となる筈である。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。